JAPANESE MODERNISTS IN NATURE

IN PHOTOS

5

谷崎潤一郎

現代日本文学アルバム　5

谷崎潤一郎

監修委員
川端康成
井上　靖

編集委員
足立巻一
奥野健男
尾崎秀樹
北　杜夫

学習研究社

現代日本文学アルバム

第5巻

谷崎潤一郎

昭和48年9月1日　初版発行
昭和51年1月1日　再版発行

発行人　古岡　滉
編集責任者　桜田　満
発行所　株式会社 学習研究社
東京都大田区上池台4丁目40番5号
郵便番号 145　振替　東京 142930
電話 東京(03) 720 —1111 (大代表)
印刷・製本　図書印刷株式会社
製函　永井紙器印刷株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙　特種製紙株式会社

＊この本に関するお問合せやミスなどがありましたら，
文書は，東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)
学研　ユーザー・サービス部
現代日本文学アルバム係へ

電話は，東京 (03) 720－1111 へお願いします。

©1973　Printed in Japan

目次 JUNICHIRO TANIZAKI

目次

谷崎潤一郎文学へのいざない……5
谷崎潤一郎文学紀行／美の原点を求めて……奥野　健男　69
谷崎潤一郎文学旅行ガイド……涌田　佑　101
谷崎潤一郎の素顔……117

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

谷崎潤一郎とその時代……山本　健吉　181
谷崎潤一郎主要作品鑑賞小辞典……野村　尚吾　213
年譜……野村　尚吾　229
著作目録……野村　尚吾　237
主要参考文献……野村　尚吾　239

写真（「谷崎潤一郎の素顔」の一部）
北原教隆
林　忠彦
樋口　進
増田　実
渡辺義雄

資料提供
伊藤弥太郎
大貫初子
喜多川周之
木村荘十三
久米艶子
笹沼宗一郎
嶋中鵬二
妹尾健太郎
竹田鮎子
谷崎松子
土屋計雄
南木淑郎
野田宇太郎
野村尚吾
浜本澄夫
前高勢治
渡辺千万子
和辻　照

朝日新聞社
ＮＨＫ
共同通信社
国会図書館
創元社
中央公論社
東京大学教養学部図書館
奈良県吉野町観光課
日本近代文学館
日比谷高校
文藝春秋
毎日新聞社
読売新聞社
六興出版
（五十音順敬称略）

編集スタッフ
編集責任
桜田　満
編集担当
宮下　襄
校正
須山康邦

写真
谷津富夫
山本成夫
成田牧雄
矢島康次
大谷　勲

地図製作
玉木図版社

装幀　大川泰央

レイアウト　大川泰央

谷崎潤一郎文学へのいざない

松の樹と六甲　芦屋の風景

こうして見ると、雪子ばかりではない。自分も矢張生粋の関西人であり、どんなに深く関西の風土に愛着しているかが分る。別に取り立てて風情もない詰まらない此の庭だけれども、此処にイんで松の樹の多い空気の匂を嗅ぎ、六甲方面の山々を望み、澄んだ空を仰ぐだけでも、阪神間ほど住み心地のよい和やかな土地はないように感じる。それにしてもあのざわざわした、埃っぽい、白ッちゃけた東京と云う所は何と云う厭な都会であろう。東京と此方とでは風の肌触りからして違うと、雪子が口癖のように云うのも尤もである。

（「細雪」より）

細雪

芦屋の此のあたりは、もとは大部分山林や畑地だったのが、大正の末頃からぽつぽつ開けて行った土地なので、此の家の庭なども、そんなに広くはないのだけれども、昔の面影を伝えている大木の松などが二三本取り入れてあり、西北側は隣家の植え込みを隔てて六甲一帯の山や丘陵が望まれるところから、雪子はたまに上本町の本家へ帰って四五日もいてから戻って来ると、生れ変ったように気分がせいせいするのであった。

（「細雪」）

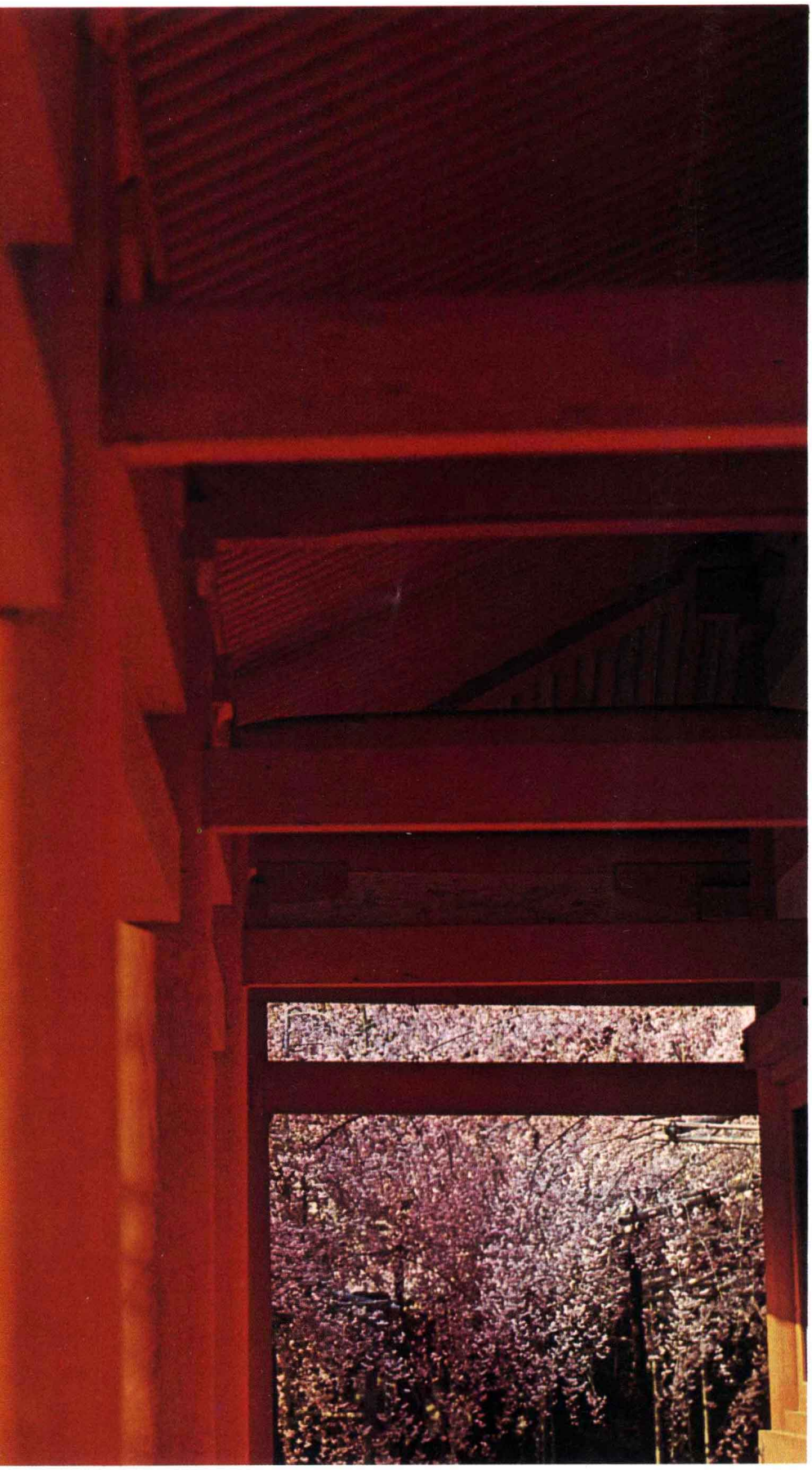
芦屋川と六甲

「細雪」の舞台　芦屋の山手住宅街

彼女が今立って見おろしている南側の方には、芝生と花壇があり、その向うにささやかな築山があって、白い細かい花をつけた小手毬が、岩組の間から懸崖になって水のない池に垂れかかり、右の方の汀には桜とライラックが咲いていた。……そのライラックの木の西に、まだ芽を出さない栴檀と青桐があり、栴檀の南に、仏蘭西語で「セレンガ」と云う灌木の一種があった。

（「細雪」）

古風で引っ込み思案の三女雪子、奔放に生きる末娘妙子、二人の妹のことに心をくだく次女の幸子、大阪船場蒔岡家の四姉妹のうち三人の生活が、六甲の山裾芦屋川の幸子の夫貞之助の家を中心に展開する。三十歳を過ぎても縁遠い雪子の縁談や刻々と移る世相を背景に、春の花見、夏の螢刈り、秋の月見と消え去ろうとする日本古来の生活行事を絵巻物のように綴りながら、一見華やかな三姉妹の生活や苦悩が細やかに観察され浮き彫られる。戦中の度重なる検閲の下、空襲の下、疎開先と、戦後にわたり書き続けられた大作である。



あの、神門を這入って大極殿を正面に見、西の廻廊から神苑に第一歩を踏み入れた所にある数株の紅枝垂、――海外にまでその美を謳われていると云う名木の桜が、今年はどんな風であろうか、もうおそくはないであろうかと気を揉みながら、毎年廻廊の門をくぐる迄はあやしく胸をときめかすのであるが、今年も同じような思いで門をくぐった彼女達は、忽ち夕空にひろがっている紅の雲を仰ぎ見ると、皆が一様に、

「あー」

と、感歎の声を放った。此の一瞬こそ、二日間の行事の頂点であり、此の一瞬の喜びこそ、去年の春が暮れて以来一年に亙って待ちつづけていたものなのである。

（「細雪」）

京都の春　平安神宮神苑の紅枝垂

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

貞之助は、三人の姉妹や娘を先に歩かして、あとからライカを持って追いながら、白虎池の菖蒲の生えた汀を行くところ、蒼竜池の臥竜橋の石の上を、水面に影を落して渡るところ、栖鳳池の西側の小松山から通路へ枝をひろげている一際見事な花の下に並んだところ、など、いつも写す所では必ず写して行くのであったが、此処でも彼女たちの一行は、毎年いろいろな見知らぬ人に姿を撮られるのが例で、ていねいな人は態々その旨を申し入れて許可を求め、無躾な人は無断で隙をうかがってシャッターを切った。（「細雪」）

嵯峨野　広沢の池の桜

明くる日の朝は、先ず広沢の池のほとりへ行って、水に枝をさしかけた一本の桜の樹の下に、幸子、悦子、雪子、妙子、と云う順に列んだ姿を、遍照寺山を背景に入れて貞之助がライカに収めた。此の桜には一つの思い出があると云うのは、或る年の春、此の池のほとりへ来た時に、写真機を持った一人の見知らぬ紳士が、是非あなた方を撮らして下さいと懇望するままに、二三枚撮って貰ったところ、紳士は慇懃に礼を述べて、もしよく映っておりましたらお送りいたしますからと、所番地を控えて別れたが、旬日の後、約束を違えず送って来てくれた中に素晴しいのが一枚あった。（「細雪」）

◀平安神宮　臥竜橋と桜

▼同じく平安神宮　栖鳳池と桜

嵯峨野の小道　落柿舎付近

大沢の池の堤の上へもちょっと上って見て、大覚寺、清涼寺、天竜寺の門の前を通って、今年もまた渡月橋の袂へ来た。……幸子たちは、去年は大悲閣で、一昨年は橋の袂の三軒家で、弁当の折詰を開いたが、今年は十三詣りで有名な虚空蔵菩薩のある法輪寺の山を選んだ。そして再び渡月橋を渡り、天竜寺の北の竹藪の中の径を、

「悦ちゃん、雀のお宿よ」

などと云いながら、野の宮の方へ歩いたが、午後になってから風が出て急にうすら寒くなり、厭離庵の庵室を訪れた時分には、あの入口のところにある桜が姉妹たちの袂におびただしく散った。

（「細雪」）

◀大沢の池と大覚寺

▼野宮神社

蓼喰う虫

明け放たれた二階の縁からは船着き場に沿うた一とすじの路をへだてもう暮れがたの海のけしきが展けていた。淡の輪がよいの船であろう、「紀淡丸」と記した汽船が桟橋を離れて行くのだが、四五百噸にも足らないほどの船体がぐるりと船首を向き変えるとき、入り江の岸が船尾と擦れ擦れになるくらいにもそこの港は小さいのである。要は縁側に座布団を敷いて、港の出口をふさいでいる砂糖菓子のように可愛いコンクリートの防波堤を眺めた。堤の上の同じように可愛い燈籠にはもう灯がともっているらしいけれど、水の面はまだ浅黄色に明るく、二三人の男の燈籠の根もとにしゃがんで釣りを垂れているのが見える。別に絶景と云

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com